

著者のことば

『正法眼蔵』は、初めから終わりまで貴重な言葉ばかりで満たされている。そのような言語表現に触れるにはまず、自己を忘れる以外にない。自己が読むのではなくて、章句そのものと一体化するという在り方において自己を捨てること、取りも直さず、『正法眼蔵』を「読解」するという行為であり、また「解脱」であると言つこともできよう。この時、本文そのものが語り出す。それも本文が本文以外の何物かを語るのではなくて、本文自身を語るのである、そこでは、あらゆる既得の知識が脱落することによって、真実なり真理なりが取り逃がされるのではなくて、むしろ逆に、真実そのものの姿が、ありのままの形において立ち現れる。つまり、言語表現が、真実そのものの具体的な現実における立ち現われの成就として受け止められるわけである。そうになると、その言語表現においては、もはや語る主体と語られる対象、語り手と聞き手といった二元論的別け隔ては消え去るのだ。語る者と聞く者とは、同一の資格で、同一の空間、同一の時間に入り、絶対普遍的な同一者となる。そのような境域こそが、『正法眼蔵』のテキスト本文の究極的な在り方なのである。

東京大学名誉教授 森本和夫

生ける『正法眼蔵』

鶴首して待ち望む

「身心一如」の視座からの『正法眼蔵』

京都大学名誉教授

上田閑照

作家・天台宗僧侶

瀬戸内寂聴

駒澤大学総長

奈良康明

『正法眼蔵』とは私たちにとつてどのようなテキストか。それはこの「読解」が十分に語っている。「掛け替えの無い師」寺田透の『道元和尚広録』（一九九五年）を嗣いで、森本さん畢生の大業である『正法眼蔵』全巻の「読解」が全現成した。『正法眼蔵』をめぐる七五〇年の歴史において、殊に『正法眼蔵』を「テキスト」として読むことが始まって以来、森本さんは徹底的にそして最も「よく」読んだ極少数の一人と言える。『正法眼蔵』を言葉の言い得るところ（道得）に向かつて「読解」という仕方、「読む」ことが、森本さん自身の殆ど行としての「生きる」とそのことになって既に半世紀、今や森本さんは生ける『正法眼蔵』と言つても過言ではないであろう。その森本さんはまたフランス現代思想のすぐれた研究者であり、「読解」は『正法眼蔵』と現代思想との十字路における「思想的な営為」でもある。『正法眼蔵』を「読む」歴史においても、現代思想にとつても、正に画期的なこの「読解」の刊行を心から慶ぶとともに、古典の質に相応しい大活字版と現代に便なる文庫版との並行出版に対して、森本さんの偉業の故であるにしても、現在の出版状況を思うとき、筑摩書房にも特に敬意を表したい。

森本和夫さんは、もう半世紀以上の友人である。丹羽文雄氏の主宰されている同人雑誌「文学者」に入れていたのだいた時、そこに森本さんがいた。そこには作家になろうと夢見る若者が集っていた。みんな同志でみんなライバルであった。そういう仲間は、お互い四十年も会わないでも、声を掛けさえすれば、たちまち半世紀前と同じ熱い友情が通いあうのは摩訶不思議である。私は自分の生活の忙しさにかまけて、森本さんが二十年も前にフランスの禅道尼苑で、弟子丸泰仙師から黙道泰元という法名を授与されたれっきとした仏教者になっていられたことも、十年ほど前から「かわさき市民アカデミー」で生涯学習者に週に一度『正法眼蔵』の講義を続けてこられたことも知らなかった。その傍ら『正法眼蔵』の全巻読解という気の遠くなるような膨大な作業に没頭していられることもはじめて教えられた。フランス文学を専攻した森本さんの温かな表情の中に、こんな情熱が秘められていたことは愕きで、道元禅師に憧れ、『正法眼蔵』を座右の書として離さない私にとつては、一日も早く、旧友の心魂こめた全読解を読ませてほしいと気持が高ぶってくる。鶴首して出版される日を待ち望んでいる。

森本和夫先生は人も知る現代フランス哲学の大家である。特にデリダとの交遊でも知られていて、『デリダから道元へ——〈脱構築〉と〈身心脱落〉——』などの著作もある。その先生が『正法眼蔵読解』が出ることになった。喜ばしいことである。私は道元禅師の宗教の根本の姿勢は「身心一如」であり、物心、主客を実体的に分ける西欧の伝統的思考では捉えられないと思っている。しかし、デリダは二元論的な「分別」を固定する思考姿勢を破ろうとしている人である。真実を把握する東洋的な姿勢のグロバル化にも連なる。同様の視座にたつ森本先生の『正法眼蔵』の「読解」である。「はじめに」において先生は読解とは禅師の思想を生き生きとした形で受け止める理解である、といわれる。

新たな知の構築であろう。従来宗門の伝統は『正法眼蔵』を主として実践修行の面から重視しているし、それは宗門の命脈である。それに比して、知的な営みは、残念ながら、十分とは言えず、いわば「閉ざされた宗学」になっている。『正法眼蔵』の身心一如の宗教的世界が、新しい知的な枠組みのなかはどう「読解」されるのか。楽しみである。